実践のまとめ（第４学年　社会科）

柏崎市立荒浜小学校　教諭　本間　工太郎

１　研究テーマ

社会的事象を多角的に考え、「思考力、判断力、表現力」を高める方策の工夫

２　研究テーマについて

⑴　テーマ設定の意図

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編では、教科目標の「思考力、判断力、表現力等」の中で、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象を比較・分類・関連付けしながら、多角的に考えていくことが求められている。児童には、社会的な事象を様々な視点から追究し、思考力、判断力、表現力を発揮しながら自らの考えを深めていくことに楽しさを覚えてほしいと考えている。

自分自身の授業を振り返ると、児童の「思考力、判断力、表現力」を育成するにあたり、課題が２点考えられる。１点目は、多様な価値観や考えが生かされる課題を設定できていなかったことである。資料を基に、児童が課題に対してどのような考えをもつのか想定しきれていなかった。２点目に、当事者意識を高め、一人一人に考えをもたせるための手立てが不足していたことが挙げられる。そこで、研究テーマを社会的事象を多角的に考え、「思考力、判断力、表現力」を高める方策の工夫と設定した。

⑵　研究テーマに迫るために

①　複数の視点や立場から考え、選択・判断できる課題の設定

社会的事象を多角的に考える力を涵養するためには、多様な価値観や考えが生かされる課題が必要であると考える。課題に対して、体験活動をベースに自分の立場を選択・判断する場を設定し、その根拠に目を向けさせたい。また、他者と考えを共有することで、多様な考えの中から自分の立場に応じたものを選択・判断し、自らの考えを再構築していくことを目指す。

②　知識と体験のズレから、思考力、判断力、表現力を高める。

児童は、自然や生活環境を守るために、プラスチック製品の使用を控えることが望ましいことに気付いている。この段階では、ごみ問題に対して当事者意識をもたずに表面的な考えに陥ってしまうことが想定される。そこで、実際にプラスチック製品の使用を控える体験活動を通して、理想と現実のギャップに気付かせたい。一人一人が実感を伴い、葛藤しながら自分たちにできることを模索する姿へとつなげていく。

⑶　研究テーマに関わる評価

次の２つの観点から評価を行う。

①　複数の情報を基に、自分の考えを表現できる児童が80％以上になる。

②　単元の実施前後で、児童への自己の変容に関するアンケート調査を行う。項目「資料から読み取った情報を比較したり、関連付けたりして考えることができたか」において、80％以上の児童が肯定的な回答をしている。

３　単元と指導計画

⑴　単元名

ごみはどこへ（小学社会４　教育出版）

⑵　単元の目標

ごみの処理にかかわる対策や事業について調べることを通して課題を把握し、複数の資料等から読み取った情報を基に、課題解決に向けて自分なりの関わり方を選択・判断し、表現することができる。

⑶　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ごみを処理する事業は、生活環境の維持と向上につながっていることを理解している。また、具体的資料から、必要な情報を調べたり、まとめたりしている。	ごみ処理に見られる課題に対して、資料を基に自分なりの関わり方を表現している。	課題解決に向けて、自らもごみの適切な処理や再利用に協力しようとしている。

⑷　単元の指導計画と評価計画（全14時間、本時12／14時間）

次 （時数）	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 （８）	・ごみのゆくえについて課題設定し、予想する。 ・ごみを分別して収集していることをつかむ。 ・クリーンセンターの仕組みや燃やすごみの処理の仕方をつかむ。 ・最終処分場の処理の工夫や課題を捉える。 ・資源ごみの処理の仕方とゆくえを探る。 ・クリーンセンターへ訪問し、ごみ処理とリサイクルの理解を深める。⑵ ・見学までの学習の振り返りをする。	◎自分や家族が出したごみは、最終的にどのようになるだろう。 ◎家から出されたごみは、どのように収集されるのだろう。 ◎クリーンセンターでは、どのようにごみを処理しているのだろう。 ◎燃やしたごみの灰は、どうなるのだろう。 ◎資源ごみは、どのように処理されているのだろう。 ◎ごみ処理とリサイクルについて聞いてみよう。 ・３Ｒやプラスチックごみの問題について知る ◎新たに気付いた問題について、どのように解決するか考えよう。	態収集されたごみの処理について、自分なりに予想している。【発言・ノート】 知・技ごみを収集する際の工夫について捉える。【発言・ノート】 知・技資料から、ごみの処理の仕方について読み取っている。【ノート】 知・技最終処分場の処理の工夫や課題を捉える。【発言】 知・技処理方法やリサイクルについて捉える。【ノート】 態所員の方に、積極的に質問をしている。【発言・ワークシート】 思・判・表前時までの学習を振り返り、新たな課題や疑問を挙げている。【ノート】
2 （６）	・ごみ問題の解決に向けて、３Ｒの取組にせまる。（地域や店、企業の取組を基に）	◎プラスチックごみ問題の解決に向けて、自分たちにできることは何か。 「脱プラスチックweek」	態自分にできることについて意欲的に発言している。【発言】

本時	・３Rの実際をつかむ。 ・自分たちの生活とプラスチック製品との関わりに気付く。 ・プラスチック製品との関わり方について考える。 ・前時の振り返りを基に、日本のごみ問題に目を向ける。 ・ごみ問題の解決に向けて、どのように関わるか考える。	◎３Ｒは、プラスチックごみ問題に本当に有効か。（リサイクルに焦点化） ◎脱プラスチックweekを振り返ろう。（プラスチックの利点を確認） ◎脱プラスチック社会は、本当に実現できるのか。 ◎日本は、プラスチックごみ問題の対策だけでよいのか。 ◎現代のごみ問題に対して、自分に何ができるか。	知・技３Rの実際の様子について捉えている。【ノート】 知・技身の回りにプラスチック製品が溢れており、ごみ問題との関連に気付く。 思・判・表プラスチック製品との関わり方について、根拠を基に考えを述べている。【ノート・発言】 知・技日本のごみ処理の課題について理解している。 思・判・表自分に何ができるか表現している。【ノート】

４　単元と児童

⑴　単元について

本単元は、地域の人々の生活にとって必要なごみ処理について調べ、その問題点について考えていく。関連する施設や設備を調査したり、資料を活用したりすることで、ごみ処理対策や事業が地域の生活環境の維持と向上につながっていることを捉えていく。

本時では、プラスチック製品と自分の生活との関わりについて考えていく。１・２時間目で、自分の生活にはプラスチック製品があふれていることをつかんでいる。それらの問題点の解決に向けて、３Ｒの有効性が示される一方で課題にも気付いている。３年総合学習でのＳＤＧｓの学習を生かしながら、自分はプラスチック問題についてどのように関わっていくのか多角的に考えていく。

⑵　児童の実態

本学級は、男子19人、女子15人、計34人である。好奇心旺盛であり、体験活動を通して自分なりに学びを深めていく児童が多い。一方、実感を伴いにくく、自分事として捉えられない学習に対しては、意欲的に取り組めない傾向がある。

社会科については、苦手意識をもっている児童が多い。社会的事象に関心をもったり、多角的に自分の考えを表現したりすることに課題がある。調べ学習を進めて、最後に課題に対しての自分の考えをまとめようとするが、一つの資料から読み取った情報を基に考えを書くのみになってしまう傾向にあった。改善を図るため、調べた情報を整理して自分の考えを表現する活動に取り組んでいるが、まだまだ課題が残る。

そこで、本単元を通して、複数の資料から社会的事象を多角的に捉え、読み取った情報を関連付けて、考えを表現できるようにしたい。

５　本時の展開（令和４年９月22日実施）

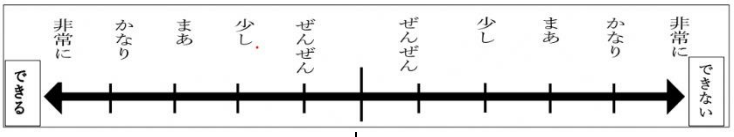
⑴　ねらい

脱プラスチック社会が実現できるかどうか議論することを通して、ごみ問題を多角的に捉え、今後の自分なりのプラスチック製品との関わり方を考え、表現することができる。

⑵　展開の構想

昨年度の総合学習におけるSDGｓの学習から、プラごみが環境に影響を与えることや脱プラスチックが世間では注目されていることに気付いている。また、「プラスチック製品を使用しないこと」、「リサイクルに取り組むこと」がプラごみの問題に対して有効であることも知っている。本時では、こうした既習と「脱プラスチックWeek」の体験から生じた葛藤をもとに、前時に児童が設定した課題「脱プラスチック社会は、本当に実現できるか」について話し合っていく。本時は、こうした話合いを通して、ごみ問題の現状を多角的に捉えることで、自分の考えを更新できるようにする。

⑶　展開

時間（分）	学習活動	教師の働き掛け 予想される児童（生徒）の反応	□評価　○支援　◇留意点
5分	○前時までの確認	脱プラスチック社会は、本当に実現できるのか。	
30分	○自分の立場と理由を考え、発表する。	【できる】 ・「エコバック」など、プラスチックの代わりの物が少しずつ出てきている。 ・使い捨てプラスチックを禁止する国もある。	○各自の立場と自信度を可視化するためにネームプレートを活用する。
			
	○自分の立場とは、反対の考えに対して質問や意見を述べる。	【できない】 ・「脱プラスチックｗeek」で、身の回りのほとんどがプラスチック製品だったから。 ・３Ｒを意識しながら使っていくしかない。	○今までの学習で学んだことを整理したシートも活用して、様々な視点から考えられるようにする。 ◇「自然環境」と「生活環境」の関連性に着目させる。
	○それぞれの立場に関する資料を読む。	○資料から「身の回りのほとんどがプラスチック製品であること」「プラスチックの代替品」を確認。	◇「脱プラスチックweek」で感じたことにも着目させる。 ◇意見に偏りが見られる場合に確認する。
10分	○自分とは異なる視点や考えを踏まえて、プラスチック製品との関わり方について自分の考えを記述する。	・確かに身の回りのほとんどがプラスチックだから、使わないことはできないかもしれない。だけど、使わなくてもいいものがあるはずだから、自分の生活を見直していきたい。 ・リサイクルをしているから、大丈夫だと思っていたけど、環境	思・判・表 自分とは異なる視点や考えに理解を示しつつ、根拠を基に自分の考えを表現できる。 ◇具体的な行動よりも、以前の自分の考えを見つめ直しているかに着目する。

		に影響を与えたり、お金もかかったりするから、使う量を減らしていきたい。	

⑷　評価

・　プラスチック製品との関わり方を考える活動を通して、ごみ問題を多角的に捉え、自分なりに関わり方を表現することができたか。（思考・判断・表現）

６　実践を振り返って

⑴　授業の実際

①　単元の課題を設定して、ごみ処理の方法や課題を捉える（第１次）

資料を基に、児童にとって当たり前のようになされていたごみ処理について関心を高め、「自分や家族が出したごみは、最終的にはどのようになるだろう」という単元の課題を設定した。まずは、自分たちの家庭ごみはどのように処理されているのかという児童の疑問を基に調べ学習を進めていった。家庭のごみ調べを行うことで、学習内容が身近なものであると認識し、ごみ問題を自分事として考えていくための素地を養った。

学習の中盤では、ごみ処理における自分たちの疑問を解決しようとクリーンセンター見学に行った。施設の方の話を聞き、ごみ処理を行っている立場からの課題があることを児童たちは知った。振り返りでは、環境面に注目が集まった。プラスチックごみが生き物に影響を与えるという事実を知り、食物連鎖の観点から自分たち人間にも無関係ではないことに気付いた。そこで、プラスチックごみ問題を新たな課題として、追究することとした。

②　知識とのズレを生む、体験活動を行う（第２次前半）

プラスチックごみ問題の解決に向けて自分たちにできることは何かを３Ｒを切り口に考えていった。児童の話合いから、一週間プラスチック製品の使用を控える「脱プラスチックweek」を行うこととなった。家庭での取組だけでなく、自分たちで許可をもらい、学校給食での牛乳のストローの使用も控えた。児童は、知識としてプラスチック製品の使用を控えることが解決策であることは知っている。しかし、実際の取組の難しさに気付いていない。ここでは、自分の思考と体験とのズレを生むことをねらいとした。

初日から取組の難しさに気付いた児童が半数ほどいた。食材のほとんどがプラスチック製品の包装で販売されているため、プラスチック無しには食事の献立が成立しないことに気付いた。さらに、買い物の際に身の回りのほとんどの物がプラスチックで包装されているため、使用せざるを得ないことを知った。

実際に取り組むことで、プラスチック製品を使わない方がよいということは知識として分かっていても生活の中からプラスチック製品を減らしていくことがどんなに難しいのか実感を伴って理解することができた。

③　プラスチックごみ問題の解決に向けて、自分たちにできることを考える活動を通して、日本全体の問題に迫っていく（第２次後半）

本時では、児童が２次の最初に設定した「脱プラスチック社会は本当に実現できるのか」を課題とした。全員が考えをもち参加できるよう、自分の立場と自信度を可視化する支援を行った。今までの学習や体験を基に、様々な視点から意見が述べられた。環境面と利便性の視点から、葛藤しながら自分の考えを表現しようとする姿も見られた。しかし、議論の方向性が定まっておらず、立場の主張に執着する児童も出てしまった。

単元終末では、「脱プラスチック社会は本当に実現できるのか」に対して「実現できない」とする立場に対して、「できない」で終わってしまってはいけないことを確認した。その後、「プラスチックごみ問題を解決すれば、日本のごみ問題は解決されるか」と児童に問いかけた。他にも問題が多く存在することに気付いており、「食品ロス」や「焼却量の多さ」を示す資料を通して、プラスチックごみ問題の解決だけでは不足していることを確認した。そうすることで、プラスチックごみ問題から日本のごみ問題へと視野を広げていった。ここでは、プラスチックごみの学びを生かしつつ、食品ロスや３Ｒの視点から対策を述べていた。こうした話合いから、児童は自分の生活を見直すことが対策につながることに気付くことができた。

⑵　研究テーマについて

①　児童のワークシートの記述

「複数の情報を基に、自分の考えを表現できる児童」は34人中21人（61.7%）であった。本時では、まず児童一人一人が立場を決めることで、理由を考える必然性が生まれた。児童からは、「プラスチック製品を使わないと不便だけど、魚がプラスチックを食べて、人間もそれを食べることになってしまう」という考えがでた。これは、利便性、環境、食物連鎖の視点から課題に対して考えを述べたと捉えられる。他にも、環境、価格、利便性、食物連鎖、昔の生活様式など、多角的に考えを表現している児童がいた。

上記から、児童が課題に対して立場を表明することは有効であると考える。一方、様々な視点から思考するものの、最終的に一面的な考えを述べている様子も見られた。課題把握が正確にできておらず、食品ロス問題と混同して考えを述べている児童もいた。

②　児童への自己の変容に関するアンケート調査

「資料から読み取った情報を比べたり、関連づけたりして考えることができたか」（図１）では、肯定的な評価55.9%、否定的な評価が23.5%であった。この結果と「①児童のワークシートの記述」の結果を比較すると実際の姿と児童のできているという実感とにズレが生じていることが分かった。多くの資料に触れたり、見学や体験活動を行ったりすることで、多角的に考えをめぐらせる場面設定はできた。しかし、資料や体験から情報を読み取ったり、情報同士を関係づけたりする際の手立てが不足していたことが考えられる。多くの資料に触れても、そこから情報を読み取り、整理・分析・表現するまでの過程は、一人一人の資質・能力頼りとなってしまった。

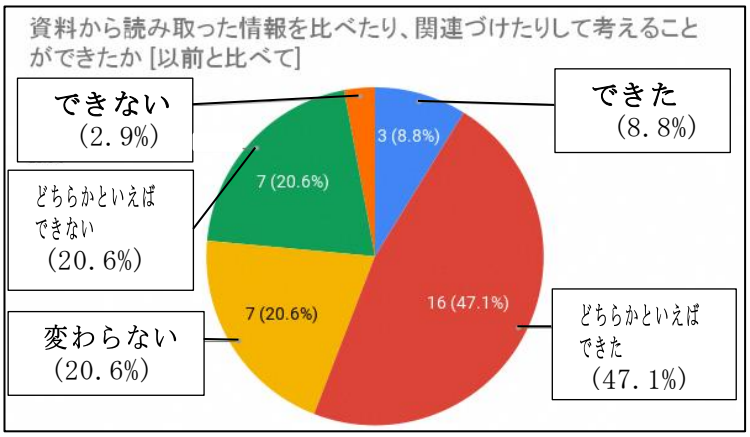


図１

⑶　今後の課題

本研究では、全員が課題に対して立場を選択・判断し、表現する活動を行った。自分の知識と体験活動とのズレから葛藤を生み出すことで、児童は様々な視点から考えることができた。しかし、資料の読み取りや考えを構築するまでの過程への手立てが足りず、知識が断片的なものとなってしまった。その結果、考えを表現する場面では一面的な記述が目立ってしまった。

また、どちらの立場にせよ、最終的に自分事として捉え、どのようにして現状の問題を改善していくか、方向付けることが課題として残った。立場の表明は、思考をめぐらす手段であり、目的ではないということを単元構成の段階で意識すべきであった。

今後は、資料の読み取りにおける支援、獲得した知識を整理したり、考えを表現したりする際の手立てを講じることが必要であると考える。メリット・デメリット、因果関係などの視点を設定することで、知識や情報を整理し、自分の考えを表現につなげやすくすることで、課題を解決していきたい。

＜引用・参考文献＞

・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編』2018

・村田辰明『実践！社会科授業のユニバーサルデザイン　展開と技法』東洋館出版社．2019

・宮下祐治『ESD 構成概念を取り入れた社会科の実践－小学校第 4 学年単元「廃棄物の処理」－』教育実践研究　第 30 集　上越教育大学学校教育実践研究センター．2020

・栗田明典『多様な人の現状を踏まえて社会への関わり方を選択・判断する児童を育成する小学校社会科授業－第 4 学年「ごみはどこへ」の実践を通して－』教育実践研究　第 31 集　上越教育大学学校教育実践研究センター．2021